

すべては故郷のために、 その一心で

壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市でも
2地区で具体的な復興まちづくりが動き出した。
強い使命感で復興に向き合う、その姿に迫った。



小田島 永和 おだしま ひさかず (右)
小林 章 こばやし あきら (左)
ともに、2011年4月から陸前高田市の復興計画策定支援を担当。

これまでのキャリアは復興のために

「故郷のために何かしたい。その一心でした」

盛岡出身の小田島 永和は、東京都心部の区画整理事業を担当していたが、故郷への強い思いから被災地への派遣を希望した。

大学では建築・都市計画を専攻。入社してニュータウン開発や既存市街地の区画整理事業に携わり、災害復旧や不動産取引のノウハウも得た。小田島は自分にできることは何かと考えたときに、これらすべてが震災復興に役立つことに気付いた。

「これまでニュータウン開発に10年、都市再生に10年、そしてこの先10年は復興のために。自分のキャリアは復興のためにあったのかとさえ思いました」

盛岡が地元だけに岩手県庁に知り合いも多い。陸前高田には高校



いまだ、がれきが残る被災地



時代に部活動の合宿で訪れたこともあり土地勘もある。そして方言もわかる。小田島を取り巻くすべてが復興にプラスになると考えた。小田島の妻は釜石出身。震災の2週間後にはリュックを担ぎ、単身で支援に向かったという。そんな妻の行動力にも大きな刺激を受け、「故郷のために」と決意を固めた。

一歩ずつだが 一日も早い復興を

「復興計画の策定支援」をミッションに、陸前高田に着いたのは昨年4月28日。当初はとにかく人手が足りない状況で、頼まれることはすべて手伝った。そういうところからのスタートだった。

復興を実現するには、どのような事業手法がベストか、法令上の規制をどうクリアするのか、網羅的な復興計画から現実を見ながら実

施可能な事業計画にするにはどうしたらいいか。気が遠くなるほど多くの課題、しかも机上では解けない課題を、関係機関と根気よく交渉を重ねながら、ひとつずつ解決していくことが求められた。国道一本を計画するだけでも、国や県、警察との

細かな協議が不可欠だ。また、ある地区の計画では、1000万㎡の土を山から削って防



陸前高田市役所



復興のシンボル、高田松原の「奇跡の一本松」

潮堤や盛土に使うという話も出ているが、これまでの経験上の数字では年間100万㎡が限界。これだと10年かかる計算だ。

「仮設住宅に入っている方に10年待てとは言えません。現実を踏まえながら、いかに早く事業が進められるか、常に考えています」

故郷の1日も早い復興への願いだ。「早く元の暮らしを取り戻してほしい」という気持ちでいっぱいです。市役所の皆さんは自身も被災されているのに、私たちが引っ張ってくれて、逆に励まされています。陸前高田の皆さんとは強い縁を感じています。この気持ちを大切にしながら、これからも一緒に頑張りたいと思います」

3月2日には、市とURの間で復興事業の推進に関する協力協定が結ばれ、責任ある立場での発言が可能になった。復興事業の中心となる、高田地区と今泉地区では、測量やボーリング調査も始まった。いま、小田島を支えているのが、

4月からは5名体制となつて、

これから新たなスタートライン。陸前高田のシンボル「奇跡の一本松」さながらに、力強く復興支援を推し進める。